

## 地域特性からみる初婚年齢上昇・有配偶出生力低下のメカニズムの解明(第3報) 出生動向に影響を及ぼす要因分析

○山下美紀\*,赤尾泰子\*\*,正保正恵\*3,山田知子\*4,渡辺広二\*5

(\*ノートルダム清心女子大学\*\*四国大学\*3福山市立女子短大\*4比治山大短大\*5鳴門教育大学)

目的：本報告は、初婚年齢が低く出生力が高い地域（H 地域）と初婚年齢が高く出生力が低い地域（L 地域）における出生動向に影響を及ぼしている要因について言及するものである。とくに各地域の特性(例えば制度や設備の状況や準拠集団の拘束力など)から出生動向を探り、「子どもを産む、産まない」あるいは「何人子どもを産むか」といった人びとの出産行動を規定する要因の分析に狙いを定めている。

方法：出生力に影響を及ぼす要因を探るために、「理想の子ども数」と「実際の子ども数」を被説明変数とし、属性(性別、年齢、学歴など)、世帯収入、親との同居実態、性別役割分業観、結婚の有無、本人および地域の結婚観、結婚に対する干渉、問題点、適齢規範、支援整備状況、地域のつながりおよび満足度、本人および地域の子ども観、出産に対する干渉、問題点、子育て協力、などを説明変数に設定し、一括投入方式の重回帰分析を行った。

結果：変数を指標化するために、子ども観に関する 10 項目および子どもを持つ上での問題点に関する 15 項目を主因子法、バリマックス回転により、因子分析を行った結果、子ども観については「伝統的子ども観」「現代的子ども観」の 2 因子、問題点については「子育て遂行上のデメリット」「周囲の状況との不調和」「子育て環境上の問題点」の 3 因子が抽出された。次にこれらの因子を用いて、理想の子ども数に及ぼす影響の要因を探ったところ、H 地域では実際の子ども数や親戚の規範が、また L 地域では職場や地域の規範や干渉、子育て環境上の問題点などが影響していた。また実際の子ども数については、H 地域では伝統的子ども観や理想の子ども数が、L 地域では婚姻年齢が影響していることが明らかになった。